
イチゴさんの射殺劇。

国後旺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イチゴさんの射殺劇。

【Zコード】

Z3905E

【作者名】

国後旺

【あらすじ】

苺のイチゴさんが、自分の彼女であるイチゴをジャムにした人間公を、射殺しにいく物語。（ジャンル：ブラックジョーク＆射殺劇）

(前書き)

意味が分からぬモノが嫌いな方には、オススメできません。

あるゴージャスな家の冷蔵庫に生息している、苺のイチゴさんの嘆き。

『ハルカ、ハルカ』といつも呼んでいた。

『あのクソ人間公がオレの彼女のイチゴちゃんをイチゴジャムにしてパンにギッタンベツタンと塗りたくりやがつてしかもハチミツとセットでしかもフランスパンにフランスパンにフランスパンにいいいい！！！』

「こゝへ無難に酔へやリフを、エトヨトモエヌ、招へ——
と申めだすゆつに聞こせつた。

『復讐だ、復讐してやる！ 人間コロスケビもを… 一人残らずブチ
ぶちブチぶちブチコロ！ ブチコロ！！ ブチ、コロ！！！』

イチゴさん、怒りからか、顔が真っ赤です。まさにキングオブレッズド。

『そうと決まれば、アイツに連絡しないと』

イチゴさんはアタマのケータイヘタを取つて、ピッピッ、とヘタについてたヘタンを押しています。

ヘタソ番号は、いち、いち、いち、いち、一〇。

そう…それは、親友とも呼べる…頼れる戦友の連絡先用ヘタン番号です。

ある繁華街に生息している、母のイチゴローハへの知らせ。

イチゴローハはカーペットの上で寝そべっていました。隣には、妻のイチヨがいます。タネを押し付けあって…スキンシップでしょうか。

そんなとき、不意に、

ヘタヘタヘタヘタ、ヘタヘタヘタヘタ、トイチゴローハアタマのヘタから、着信音が鳴ります。

「」の番号は、マブダチの…！」

イチゴローハはヘタを慌てて取りました。そのせいでしょうか。アタマからイチゴエキスが吹き出てカーペットにベツタツ。恐らく、このシミ…しばらく取れないでしょう。

『イチゴローハ、復讐の手伝いをしてくれ…』

さすがはイチゴさん。いきなりすぎです。

「モチロンセー…マブイチゴ…！」

応じるイチゴローハ。マブイチゴ元気葉は要らないのです。

イチゴローハは覚悟をしました。

「行つてくる
「行つてきて」

夫婦に言葉は要らないのです。

ちなみにイチゴローはイチゴさんが今、ドコで何をしようとしているのか、全て手に取るように分かっていました。
なぜなら一人は、ウンコよりも臭い絆でつながっているからです。

「今こそ、マブダチのもとへ!」

ゴージャスな家の食堂にて。

イチゴちゃんは、食されていました。

「はあはあペチョペチョはあはあはうあ」と半ば興奮みな人間公に、フランスパンに塗られて。

今の彼女はジャム。かつての美しく、滑らかで、みずみずしいレッドボディは原型を留めていません。

ジャムの赤が燃え尽きるほどレッドであることが、唯一の名残でしょ。

そんななか、イチゴさんは冷蔵庫の内で待っていました。人間公が、再び冷蔵庫を開けるときを…。

片手にはミルクロケットランチャーを持っています。人間公を撃ち取るのに、最適な場所を陣にとり、

待つて…待つて待つて待つて、待つて…。

ガチャン!

人間公が、勢いよく冷蔵庫を開けました！

『今こそ...』

ミルクロケットランチャーを人間公に向けて、

ミルク発射！

発射、発射！

ぬああああああああ！！ イチ二、イチ二かツツ！！！

人間公、ミルクまみれ！ 服はべちょべちょです。
人間公のスカートから、ムチャクチャにミルクが滴ります。

あまいことに
人間には
床に仰向にに倒れ
これ以上にな
ほど怯みました。

そのスキを、イチゴさんは逃しません。人間公の喉元に、華麗な三回転を決めて着地！

醜い罵声とともに、人間公の口の中にミルクを発射！
発射！ 発射！！ 発射！！！

「ああ、おまえがおまえでいいんだよ。」

人間公、悲鳴すら… まともに出せないダメージです。

目からミルクがびゅーびゅー出でます。

口から「パパ」と、ミルクを出したりもしています。まるで滝の

よつです。ひょひとキリキリしますが。

『射殺完』……』

イチ「セの額から汗が流れ、それを拭いながら、やつ言こまし
た。

良じ汗かいた……つてこつ感じです。

そんなどき、

「イチ「… わん……」

悲痛な声。それも……聞こ覚えのある声……。

イチ「さんは、声の聽こえるテーブルの上に、ジャンプと空中ジ
ャンプを駆使して登りました。そして、テーブルの上の、目の上の、
ジャムの塗られたフランスパンの上へ……

『イチ「… イチ「…』

ジャムに話しあげるイチ「セど。

ジャムとなつたイチ「は、その呼び掛けに返答して一言、言こま
した。

「逃げて……」ヒ。

そのセコフを言こ終えたあと、ものす「こ騒音が鳴り響きました。

ドス、ドス、ドス、ドス……

『な、なんの音だ！？』

階段を下る音。それは、ゴージャスな家の、もつ一人の住人…。よつくんが奏でる音。

「ナニゴトか、ぬーん…？」

よつくんは驚きました。それもそのはずです。床がミルクまみれになつており、服がミルクまみれで口からミルクをこぼしまくる恋人…晴海を見つけてしまつたのだから…。

「アーウチー なんてこつた…！」

よつくん、ものすごく悲しそうです。涙ボロボロです。自分の額をペチんと叩きました。

「晴海ーん！？ 反事してよう、はつるみーーーん…！」

よつくんは、晴海の死体を抱え、何度も何度もその名を呼びました。

た。

そんなとき、よつくんはテーブルの上の、皿の上の、ジャムを塗られたフランスパンの上の、苺を睨み付けました。

晴海が苺を食べるときに、フランスパンの上にのせて食べるよつな暴挙をしたことがなかつたから…不自然に思つたのでしょう。

そして、その苺こそがイチゴさん。ちなみに、今のイチゴさんは丸腰です。

なぜなら『空中ジャンプにはジャマだな…』とこつ思いと、よつくんの存在を知らなかつたという理由も含め、ミルクロケッシュランチャーを床に投げ捨てていたからです。

イチゴさん、絶対絶命。

「「」の草、メッシュヤ怪しいネ！」

と言つて、イチゴさんを掴みにかかるよつくん。

捕まるわけにはいかず、勢い良く走り出したイチゴさん…

よつくんは勘づきました。

「お前が、この惨劇を作ったのかーー?！」

恐ろしい勘です。勘づける要素がどこにもないのに勘づいてしまいました。常人にはおよそ不可能な芸当でしょう。

『くわう、くわう』

惜しくも捕まるイチゴさん。またもや絶対絶命。

そんなときです。

よつくんがイチゴさんを捕まえるときに、踏み出していた一歩が、晴海の足に引っかかってしまい、よつくんは、イナバウアーの「」とき迫力で仰向けに転んでしまいました。自分の額をペчинと叩きます。

「オーマイガアツツツー！」

衝撃で、イチゴさんを掴んでいた手が緩みました。脱出するイチゴさん。

そのまま床のミルクロケットランチャーをキヤツチ！

『形成逆転だな、人間公』

半笑いで、ミルクロケットランチャーを構えるイチゴさん。

しかし、

ガチャヤ、ガチャ

引き金が、引けません。

先ほどの投げ捨てられた衝撃で、ミルクロケットランチャーは内部破損をおこしていたのです。

事態に気付き、身を引くイチゴさん。そして…身を引いた、その横には…

その横には、イチゴが塗りたくられたフランスパンが！
よつくんが転倒したときの衝撃で、床に落ちたのです。

イチゴさんは声を掛けようとした。

しかし、よつくんが田を覚えし、イチゴさんの方へ手を伸ばしてきたため、そんな余裕は無く、更に後ろへ逃げるイチゴさん。眉間にシワを寄せています。

しかし、よつくんが掘もうとしていたモノは、イチゴさんではな

く、

イチゴジャム付きフランスパンでした。

これには、さすがのイチゴさんも焦ります。
なぜなら、イチゴさんは…イチゴをイチゴ質にされたと思つたからです。

しかし、そんな生喝しこモノではあつませんでした。

なんど、よつくん！ イチゴジャム付もフランスパンを食べ始めたではありませんか！…

バックバク もつしゃ もつしゃ

「うわーお、ウワーオウ！ メッチャうまいやーん！…」「よつくん、ものすいこ表情です！ とにかく、ものすいこ表情です！…

「やーん」とイチゴ、悶絶しています。緊張感のかけらも無い悲鳴です。

『つわああああん！… やめろバカ！ 食つなバカーん！…』

イチゴさんは、ミルクロケッシュランチャーヨつくんの方へ構えました。

しかし、故障中なことを思って出しました。

ヤード『仕方ない！…』とか言ひて、ミルクロケッシュランチャーを投げつけることにしました。

『どひくわあおおおおおお！…』

ぶあんつ！

イチゴさんは、素晴らしいテンパつてます！

完璧な投球フォーム。 それもアンダースロー！ しかし、ミルク
ロケットランチャーッ

べ
ち
ん

よつくんの指に跳ね返され、一いつぱみじんです。

のん！

イチゴさん、悔しそうです。床を叩きまくっています。そのうえ目から赤い涙が出てます。軽くヤバい。

「うのおー、おほ、おほ。完璧だね！ 超完璧だーね！ うほほ」

遂に…遂によつくんは…。
イチゴジャム付きフランスパンを、カケラも残さずたいらげてしまひました。

『ぬあああああん！ イチクオオオオオオオオオオオオオオ！』

よつくんは笑います。鬼畜スマイルです。お腹はパンでパンパンです。そのうえ、

ダダダダダダダダダダダダッッ！！！！

彼は口内でフランスパンを小さく丸めて、吐き出し始めました！

ダダダダダダダダダダダダダダダダツツツ！－！－！

まさにブレッヂブレッヂ！

そして乱れ撃ち！！

イチゴさんのカラダが小さくなれば、即死していたでしょう。

『あんちくしょー』

ダダダダダッ！

避ける、避ける、避ける。

ダダダダダッ！

軽やかです。非常に軽やかなステップで避けています。

ダダダダダッ！

タタタタタッ！

ダダダダダッ！

タタタタタッ！

ダダダッ！

タタタタタッ！

ハビコウ ハビコウ

『…弾切れか？』

よつくんの口元を見て、イチゴさんは言いました。
イチゴさんの顔は、笑いながら泣いています。

「オーウウ！ お互い様じやナーライ？」

『なー？ なぜ貴様がソレを喋れる！？』

イチゴさんは驚きました。それもそのはず、人間公であるハズのよつくんが…

イチ語を喋つたからです。

「インターナショナルに生きてるからサー！」

『ぐう！ 悔れぬな、インターナショナル』

さすがはイチゴさん。話についていけます。もはや超イチゴ（超人）の域です。

『だが、ひとつ間違いがあるぞ、人間公。オレにはまだ、武器がある』

『

その言葉に、首を傾げるよつくん。

ソレもわのはずです。現に、イチゴさんの手のひらには何も無い…。

『これはさすがに…と、よつくんは首を傾げたのでしょうか。』

「どにも無いやーん！」

『ばつかがつ…』

ノドの奥まで覗けるほどに、口を開けて叫ぶイチゴさん。
恐るべき迫力です。

『オレには最早、譲るべきものは無い…だから、』

ムツクムクムクむくむくむくむく……

イチゴさんのカラダが風船のよつに膨らんでいきます。ある意味健全だつたボディはムツクムチ！

数秒前のボディビルダーは見る影もなくハイなメタボリックに。その姿、あやうく、KONISHIKIを思い出しかねないほどに立派な風船ヤローです。

『行き先はノーライフな、この禁術を、』

しゅ―――ペタツ！

膨らみは、止まりました。

『我が道の、バッドエンド』…

種が、イチゴさんの肉体からトゲのよつに尖り、剥き出しになりました。

普段見える面とその裏側まで、バッカリ全て見えます。そして、

『イチゴマシンガン』

ズダダダダダダダダダダダダンツツツ……！

種は乱れ、飛び立ちました。

イチゴロー、ゴージャスな家に到着。そして、侵入。

それも、窓ガラスをシロップボムで粉碎して入るという方法で。イチゴローいわく、シロップの甘い香りに窓ガラスは油断して、割れるらしいです。

妻のイチヨとのスキンシップの際にいつも使用していたためか、その効力、制限時間、使い方の全てを、イチゴローはマスターしていたというかこの話し要らないのでカットしましょう。

イチゴローは見渡しました。その家のありとあらゆるところを。

「便所」

クサイです。便器が金色です。イチゴローは便器の座るところにタンを吐き、トイレのドアをバナナライフルで蜂の巣にして立ち去りました。

「風呂」

バスタブが金色です。イチゴローはそれを見て何を思ったのか、シロップボムをバスタブに投げつけて、ぶち壊して立ち去りました。

「書斎」

本棚には工口本しかありませんでした。イチゴローはソレを見て「ふんっ」と鼻で笑い、立ち去りました。

ちなみに、椅子と机は金色でした。それが理由なのかは分かりま

せんが、

イチゴローは時限型シロップボムを、その一つの光り輝く家具に設置しました。

「ドゴオオオオオオン……！」

「イエス！ イエス！…」

ガツツポーズを作りながらイチゴローは叫びました。
いつたい、ナニしにきたんでしょうか、このクソイチゴ。

「食堂」

「な！ なんだ、コレわ！」

イチゴローは瞳孔を裂くように開いて言いました。それもそのまま、

食堂が、イチゴ煙のように、机、食器、床に倒れている人間公…
その他モロモロから、イチゴの実がなつていたのですから（それにしてもキモい）。

「まさか…イチゴ…」

イチゴ煙を搔き分けて、イチゴをを探すイチゴロー。

ざわざわつ ざわざわつ ざわざわつ

ざわつ

「……………イ、イ、イチゴ…………」

イチゴローは、見つけました。

机の上で横たわる、種ひとつ付けていない、穴だらけの、シワシワのイチゴさんを……。

「ああ、あああ、何てことを、したんだ、イチゴ……」

イチゴさんの使ったイチゴマシンガン……それは、自分の命を、大気からの小汚い空気を侵入させない為のバリアだつた種を、銃弾として使用する技。

その威力はダイヤモンドも容易く貫きます。

しかし、そのリスクとして、自分のカラダを死滅させる恐ろしい禁術でもあるのです。

「アホ！ イチゴのアホオ！ 何故命捨てんねん……」

何故関西弁なんでしょうか。

『…ふ、ふふ、来るの…遅いじや…ないさかかぬねげほお……』

エキスをぶちまけるイチゴさん。

「イッチゴオオオオオオウ……」

叫んだ直後、いきなり自分の口からエキスを吐き出しあじめたイチゴロー。エキスがキラキラ輝きます。

イチゴローのエキスには再生能力があるのです。

コレを飲めば、種も完全回復すること間違いナッシングでしょう。

しかし、ひとつ難点が……。

「さあ！ 飲むのだマブイチゴッ……」

口から例のエキスを「ゴバゴバ」ぼしながら叫ぶイチゴロー。

イチゴの口にゴバゴバと入っていきます。

『ウウオオオオオオオアアアアアアアアアアアアウウ！－！－！』

叫ぶイチゴさん。復活！

『くつさああああああああ－！－！』

ゴハツ

「イッチゴオオオオオオオオウ！－！－！」

…ならず。

(後書き)

「めでなさい。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3905e/>

イチゴさんの射殺劇。

2010年10月28日00時55分発行